

本人のために良かれと思い、多くの親たちが入所施設の利用を希望する時代が長く続きましたが、今では、地域で生活し続けることを望む人が多くなりました。支援者たちも、ニーズに合わせ様々なサービスを創設しパッチワークのように組み合わせての豊かな生活を目指してきました。

しかし、振り返ってみるとニーズの発信者は家族(母)であり、家族の望む安全で安心な生活はトータルサービスの入所施設に太刀打ちできなかったと氏は語ります。家族と本人を要にした支援の展開では、親は子の意思決定を一生担うことになることになる、すなわち親離れ、子離れができない状態が続きます。

本人のニーズは、体験からしか生まれえない。「心の動くこと」⇒「試す」⇒「振り返る」⇒「心の動くこと」…を繰り返すプロセスが人生の味わいであり、たどり着いた先が自分らしい暮らしという言葉も心に響きました。そのプロセスを支えるためには、関係機関の連携が欠かせないことも改めて確認することができました。

午後のシンポジウムでは、「もし活(もしもに備える活動)のススメ」「地域生活支援拠点 大分方式」「3年目の地域生活支援拠点(鹿児島)」と3人の実践報告がありました。どの活動も苦心しながら、日々尽力されていることがよくわかりました。大阪市では地域事情が違うのでそのままを取り入れることはできませんが、相談支援事業、自立支援協議会とは一層の連携が必要であることを実感したシンポジウムでした。

【全国大会 第3分科会】



=====
第4分科会「権利擁護」
～検証！ 本人の尊厳～
 副理事長 **中島 由紀子**
 =====

第4分科会は「検証！本人の尊厳」をテーマに開催されました。午前は、10月に毎日新聞社を退職された野澤和弘氏が「障害者福祉の可能性と課題・本人中心の福祉とは」について基調講演を行ない、やまゆり園の検証、意思決定支援、情報保証、優生思想という多岐にわたる内容を話されました。

【全国大会 第4分科会】



「2016年に事件を起こしたやまゆり園の元職員が言った『障がい者是不幸を生み出す。生きている価値がない』という歪んだ障がい者観だけは看過できない」と強く語られるとともに、匿名報道についても触れ、「遺族の要望と知的障がい者施設にいたからという理由で被害者全員の匿名報道が行われたが、被害者像が伝えられないせいで読者・視聴者の感情理解が得られず、事件が風化しつつある一因になっているのではないかと話されました。そして、昨今「生産性」という物差しで人の価値を測るような風潮が強まっていることに疑問を呈し、障がいの有無・重い軽いにかかわらず全ての人に価値があることを訴えられました。

続いて、意思決定支援について説明がありました。あらゆる場面で本人に代わって意思決定を行なう全ての「他者」は、価値判断の押しつけを避けなければならない、意思決定能力が乏しい本人に代わって意思決定するためには「ベストインタレスト(最善の利益)」に適ようにすることが求められます。では、どうすればベストインタレストを導き出せるのか。それには単なる代行決定ではなく、本人と意思決定支援者の間に「信頼と安心感」が構築され、共同して決定に挑むことが重要になります。主体は本人であり、常に本人が中心にいることが支援の大前提であることを忘れてはなりません。そして意思決定支援に際しては、必要な情報を本人に理解しやすい形や方法で提示することが不可欠で、知的障がい・自閉症者への情報の合理的配慮についても説明がありました。

午後のシンポジウムは野澤氏がコーディネーターを務められ、シンポジストとして弁護士の間哉直人氏が「強制不妊手術問題と出生前診断」について、次に内閣府障害者施策委員長代理で熊本県愛隣館館長の三浦貴子氏が「意思決定支援(支援を受けた自己決定)」について発表されました。続いてスローコミュニケーション理事の羽山慎亮氏は「合理的配慮と情報提供」をテーマに、わかりやすさの必要性を話されました。